またどこかで笑って ～僕の春～

時雨修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
またどこかで笑って　～僕の春～

【Ｎコード】
Ｎ５９４２Ｄ

【作者名】
時雨修

【あらすじ】
今まで出会った中でも一番の美女を好きになる主人公、敬。恋愛経験の少ない敬の思いは届くのか。一年後にはそれぞれ旅立つ二人。そして敬とクラスメートの美女のお互いの過去とは…。過去を忘れられずに現在を生き、それでも未来のために過去を忘れようとするふたりの恋愛小説。

1、遅れた出会い

入学して二年がたった高校三年
寒い冬がようやく終わり春を迎えた

この数年
「恋愛」と言う国民的行事から遠のいていた僕にとって衝撃的な出会いがあった。正確に言うなら、出会いというより気付いたというか、なんとその相手は二年間一緒に過ごしたクラスメートだったからだ。名前は　早坂佳織　物静かで目立つ方ではない。が、僕はクラスではおろか今まで出会った中でも一二を争う美女だと思ってる。正直、話しかけてくる女子や休み時間に騒いでる奴らより遥かに可愛くて、どうせなら皆あの位になればと思ったことも少なくない。

『はぁ～、何かネタ無いかな。話しかけづれーよ』

僕が彼女を好きなのは友達は皆知るところだったが、今まで話しかけたことがなく、二年間過ごしてきたのにいきなり近づこうとすると周りに気づかれると思い恐れていた。実際前にそのようことで失敗したことがあったのだ。だがもう三年生。そんな悠長な事を言ってられる場合ではない。

「あの…早坂さん」
「え…？何？」
二人とも話すのは初めてのことで戸惑っていた。
「いや～…、その」
「何？からかってるの？」

「いや違うよ！やっぱ何でもない…」
「？そう」

『はぁ～』「何落ち込んでんだ？」
話しかけてきたのは幼なじみの聡、幼稚園から高校までずっと同じ学校にかよってる。
「いや別に…」
「なんだお前、まだはなしてねーのかよ。早くしないとだれかにとられるぞ」
「うるせーなー。俺には俺のペースがあるんだよ。」
「なんだそれ（笑）」
聡に急かされ正直焦っていた。もしこのまま進展なく卒業したら…。
彼女は上京し、敬は地元の大学へ進学する。離れてしまうのだ。

2、理由

「そう言えばお前なんで早坂のこと好きになったんだよ？」
この質問には少し焦った。
「え？なんでかって可愛いからに決まってんだろ？」
「バーカ。性格重視のお前が見た目だけで判断しないことくらい俺にはわかんだよ。何年一緒何だよ！」
「ま、まぁな…」
「おいおい、この俺に隠し事かよ～！？」
好きになった理由を話すのをためらったが、そんなに隠すことでもないため話してきかせた。
「なんつーか、度々見ててかわいさが増してきたわけよ、俺の中で。もう…分かったよ！それだけじゃねーよ、本当は…」
「何だよ？言えよ～？」
「本当は…、…まぁなんつーか運命かなってさ？」
敬は話をはぐらかした。それにはちゃんとわけがある。彼女を好きになった理由。
「なんだあほくさ、俺はてっきりお前が雫の事忘れられたのかと思ったよ。」

雫…その名前が心に深くささった。
「あ、わりぃこの事は言わない約束だったな…ごめん」
「いやいいさ。…ちょっとジュース買ってくる」
「授業始まるぞ…？」
「腹痛っていっといて」
そして敬は教室を出ていった。
いつもこうだ。自分の分が悪くなると逃げる。
しかし、いきなり言われたあの言葉は敬に授業をさぼらせるほどだった。

「雫…。」
思い出したくもない。敬にとって今までにないほどの別れ。敬は少しずつ過去を振り返っていた。今から六年前の中学一年生の頃だ。学校に入ったばっかりで、敬は聡と雫、そのほかの男女とグループを作って話していた。
……

「敬くんって面白いね！」
一番大きな声で笑っているのは他ならぬ雫だ。
「あぁ、まぁ天才だからな！」
「なにそれ～（笑）」
「雫って敬がなに言っても笑うんだな！もしかして気合うんじゃね～の！？」
聡の質問に雫が答える
「まぁそうかもね！敬くん優しいし！運命かも！」
「そうかぁ？？」
敬はとぼけていたがこう言われて嬉しくもあった。雫は顔はいい上に明るく皆から人気がある。頭も良くたまに先生をも驚かすほどだった。

……

「雫か、今どこ居んだろ…」
とその時だった。
「おい！こんな所でなにしてるんだね！授業はどうした！」
「うおぁぁあ！？すすすいません！」
ガミガミ怒鳴っているのを残し全速力で逃げ出した。顔は見られたが全校生徒が多いおかげで誰かまでは分かっていない

「あっぶねー…」

キーンコーンカーンコーン……

授業が終わった。流石に次までサボるわけにはいかないので教室に戻ることにした。

3、夢

「お～！おかえり！」
聡が明るく話しかけてきた。さっきのことは忘れたのか、それとも無理に明るく見せてるのか分からないが、少し気分が落ち着いた敬はすでに気にならずどちらでも良かった。皆は敬が腹痛だったと信じていたらしく心配して声をかけてきたのだが、それは逆に敬を申し訳ない気持ちにさせた。
「あ、そう言えば次自習だからな」
「え！？まじか？？てかなんで？」
進学科である敬のクラスにとって自習は珍しい事だ。だがほとんどの生徒が真面目で、さらに受験生なのでちゃんと自主学習をするのだが、敬は腹痛という言い訳がまだ使えそうだったので寝ることにした。チャイムがなり、皆が席に着く。それぞれが参考書なり教科書なりを引っ張り出して勉強を始めた。
「前にもこんな光景あったような…」
と思いつつも教科書を枕にして深い眠りにおちていった

……

キーンコーン…
「最近英語の授業、自習多くねーか？」
敬がぶっきらぼうに聞く
「でも楽じゃん！私としてはずっと自習でもいいかなぁ～」と雫。
聡がこれに反論した
「でもそんな自習ばっかりだったらバカになる…あぁお前は勉強し

なくても頭いいんだな。」
「は！？私はちゃんと勉強してますよーだ。てかそういえばもう夏じゃん！皆で海いこうよ！」
「お、いーねー！」皆が賛成したが敬が正論をいった
「まだ6月だぞお前ら」
「なによ～、あ、敬泳げないんだぁ！？」
「なに言ってんだ…」
ガラッ！！
いきなりドアが開き熱血先生が入ってきた。
「今さわいでたのはお前らだな。敬と雫、ちょっと職員室へこい」
「え？俺らだけ？」と聡達の方を振り返ったが、なんとあろうことか聡達は真面目に教科書をよんでいるふりをしていた。
『うわ…やられた…』
そして敬は雫と職員室へつれていかれた。
「何を話していたんだ？お前達は」
敬はここでまさか海に行くだなんてバカなことは言えないと思ったが、雫がそのバカげたことを口にした。
「え～と、今度皆で海に行こうか！…なんて話を…はは」
学年一成績の良い雫がさわいでいたのは性格上理解出きるが、この言葉には先生は驚き、笑い出してしまった
「ははははは！海？まだ6月だぞ？」
「まぁ…はぃ…」
「…ははっ、元気なのは良いことだが授業中は静かにな。勉強してるやつもいるんだからな」
この熱血先生と呼ばれる教師は怒るととてつもなく怖いが普段は生徒の味方をしてくれる、滅多にいない本当のいい先生だった。
「はい、すいませんでした」
敬が真面目に謝ったことで先生は許してくれた。敬は雫に感謝していた

教室に戻ると聡が早かったなぁと少しがっかりしたように見えた。
すると雫がこんなことを言い出した
「先生にね～あんたの名前出しちゃった！ものすごい怒ってたよ？早く呼び出せって」
敬は感心して小躍りしたくなったが、聡は真に受けて急にびびりだした
「え？嘘だろ…？は、まじで！？」
「嘘でしたー！」と雫がべーっと舌を出した。敬はもう少し引っ張っても良かったと思ったが、お詫びにハンバーガーをおごる、と聡が言ってきたので納得した

「まじでびびったじゃね～かよ～（笑）」
「あははは っ、ごめんごめん（笑）でもさ～…」

2人の声がだんだん遠のいていく

……

「…きろ、起きろよ敬！」
聡に起こされた敬は、六年前の自習から現実の自習へと戻されていた

「なんだ…夢か…」
「なんだじゃねーよ、お前汗だくだぞ。大丈夫か？」
「え…」
聡に言われて初めて気づいたが敬は異常に汗をかいていて熱まであ

った

「お前本当に病気かよ。ほら、保健室いくぞ」

そして敬は聡の肩をかりて教室をでていった。

4、夢の続き

「お前本当に気分悪くなったんだな。なんの夢見てたんだ？」

聡の肩をかりながら歩いていた。敬は頭がぼ～っとしているが言葉は聞き取れていた

「雫…」

「…そっか」

聡はそれ以上なにも聞かなかった

敬が気付いた時には保健室のベッドで横になっていた。

「お前３７．５℃も熱あるぞ。ゆっくり寝とけ次の授業で学校終わるからそん時また来るから」

「悪いな…ありがとう」

「何、別にいいって。じゃしっかり寝とけよ！」

普段は調子乗りな所もあるのだがこうゆうときは面倒も見てくれる聡に感謝していた

『本当に熱でたんだな…なんかバカみてぇ』

ザーッ。

外では雨が激しく降っていた

「雨か…帰りどうしよう、傘もってきてね～よ…」

……

ぽつぽつぽつ

「」「あ、雨止んでるよ！」

昼前に降り出した雨は小一時間ほどでやんでいた

「でも、…あ～ぁ、帰り一緒に相合い傘しようと思ってたのにぃ…」

雫は残念そうに笑った

「おーおー、お前そんなに敬が好きか？」聡は意地悪そうに笑った

そして、敬は恥ずかしそうに笑った

「いや、そんなんじゃねぇって！」

「は？お前に聞いてねーし（笑）なに照れてんだよ。」

「ちょっとー！敬をいじめないでよー！」

「ははっ」

敬は幸せだった。敬だけではなく雫も幸せだった。幸せな時ほど長く続いてほしいものだ。が、人は幸福の裏にあるものを考えもしない。そしてそれが幸福の最中に割ってはいる事を。この二人もこの後起こる悲劇を、今は思いもしなかった

……

目が覚めた

雨は…まだふっている

「また夢か」

キーンコーンカーンコーン…

敬が二度目の眠りについて一時間がたっていた

またしてもあんなに短い夢物語をみるのに一時間も費やしていた。

「おい敬、気分どうだ？」

授業を終えた聡が迎えにきた。夢のせいか熱はさがっていた。多少頭は痛むが。

「おう！なんか体が軽くなった。帰ろうぜ」
「そうかぁ！良かったじゃん。でもまだ帰れねーよ。土砂降りだし傘がない、教室いこうぜ」
聡が少しにやけた顔で話していたので、敬は怪しく思った
「でも…」
「あ～も～いいから行こうぜ！」
聡が強引に引っ張ったせいで、頭がズキンといたんだ
「はいはい、教室つきましたよ～」
にやけ顔に気づかれた聡は弁解がましくいった
「いや早坂が勉強で残るってゆーから、お前話したいんだろ？」
こう言われるとどこか気に障ることもあるが、それでも敬は嬉しかった。今の言葉で頭痛はどこかにいってしまったようだ。

ガラガラッ

嬉しいことに教室に残ってたのは、早坂佳織だけだった
「あの…早坂さん？」
と、横から聡が囁き声で小突いてきた
「お前なにびびってんだよ！いいか、見てろよ」すると聡は早坂佳織の席の前に座り、当たり前のことのように話しかけた。早坂は男子が嫌いなわけでも、話さないわけでもない。ただこちら側が話そうとしないだけだった。すぐ行動できる聡に感心していた一方、いままでの自分を責めていた
「……じゃ俺帰るね。あぁ、あと敬がなんか話したいみたいだから相手してやって。じゃあまた明日！」
そういうと敬の方へ近づき頑張れよと笑って、教室を出ていった。
『二人きりかよ…。』

だがすでに手遅れだ
早坂佳織は不思議そうに、そして困ったように敬を見ている。あまり黙っていると怒られかねないと思った。そしてこれから敬は、三年目で好きになった早坂と初めて話をすることができた。

5、人間性

「熱あったんでしょ？大丈夫？」
敬は驚いた。そして喜んだ。いつもは、これは敬の思い込みだが、普段あまり男子と話さない早坂佳織が心配そうに話しかけてくれた。夢でないことと何故か聡に感謝した。
「もう下がってるから大丈夫！」
敬は顔を真っ赤にしたが、急に声がひきつったことで早坂を笑顔にさせることができた。
「ははっ、声変だよ？まだ治ってないんじゃない？」
「だ、大丈夫だよ。早坂さんは一人で勉強？」「うん、一応受験生だしね。敬くんは進学？それとも就職？」
敬は嘘をつこうかとおもった。なぜなら目標をもって勉強してる人に向かってまだ考えてないなんて言うとすると、好まれることはまずないからだ。しかし敬はなぜか本当のことを話していた。
「ん～と…まだ決めてないんだよね…」
「そう」
正直に話したのを失敗だとおもった。が、意外にも相手も同じだった。
「私もまだここってはっきりきまってないんだよね。だいたいはきめたんだけど自信ないせいかまだ迷ってるの…」
といって、困った顔をした。受験生だから勉強する、当たり前のことに敬は関心して、早坂の困った顔をかわいくおもった。
「…敬くん？どうしたの？」
「えっ？あぁ…いやなんでも！」
さすがに本人を前にして可愛いなんて言えるはず無いが、敬は早坂のかわいさに更に惹かれていった。
「早坂さんの声初めて聞いたきがする…」
「え？そうかな？」今度は照れていた。そしてなぜかこう言ってい

た。
「うん、とても綺麗だよ」
気がついた時には手遅れだった。敬はおもったことを疑いもせず、そのまま口にしていた。早坂の反応はびっくりした様子で顔を赤らめていた。
「あ…ごめん！」
なんで謝ったのか自分でも分からなかったが、罪悪感からそうするしかなかった。
「なんであやまるの？」
今度はまた、困った顔をしてさらに疑いの入り混じった目で見つめていた。
「そうだよな！変だな俺！いや気にしないで！ごめん！はははは…」
敬はそういって教室を飛び出した。敬は一度に色々なことを考えて頭がおいつかなくなっていた。
まず、早坂は性格も良いとおもうこと。
次に、いきなり変なことを言って不快に思われたかもしれない。
そして最後に、敬は確実に、早坂佳織のことを好きになってしまっていた。顔の良さはもとより、話してみないとわからない仕草や表情、そして声。早坂のその全てに敬は完全に惹かれていた。誰がなんと言おうと、この世界で１＋１＝２であることのように、ごく普通に、当たり前のように、好きになった。同時になんとも言えない喜びがこみ上げてきていた。

6、自信と無き余裕

み～んみ～ん……

玄関を開けると、セミがジワジワと鳴いている。ようやく夏らしくなってきた。空は晴れ、そして敬の心も晴れていた。

「もう夏か。」

清々しく、行ってきます、といって家をでた。

いつもより早めの出発。

何かやり遂げたあとの達成感と失敗してないだろうかという不安感、その両方を抱えて登校していた。しかし、嫌われるかも知れないというような心配はなかった。敬は自分でも驚くほどに自信がみなぎっていた。声が綺麗だ　と告白してから早一週間、まだ恥ずかしくて話は出来ていないが、お互いに目が合うようになった。そのたびに早坂は少し顔を赤らめて目をそらす。こんな事が続いたせいか今なら告白さえ成功する自信があった。

「よー、敬。まただんまりｔｉｍｅかよ。俺が居なきゃだめなのかね。……おい、聞いてんのか？」

「あぁ悪い。で何？」

返事はしたが、視線はあまり変わってない。聡は振り返ってこう続けた。

「しかしまぁそんだけみてて飽きないね。つ～かちょっと見すぎだって、それじゃお前ストーカーだぞ」

敬はようやく視線を聡に向けた

「は！？いや違うって！」

「ストーカーは皆そーゆーの！」

と言ったが敬は聞いていない。

「いやなんか最近目が合うんだよな～。」

「気のせいだって」と即答。
ムッとした敬はこう言い返した。「そういうお前はどうなんだよ」
聡が彼女と喧嘩していたことは知っていたがその後のことは知らなかった。
「あ？俺か（笑）？絶好調だよ～ん。今朝も電話来てたし今日学校終わったらデートだよ～。」
「え？仲直りできたの？あんなにきれてたじゃん」
敬がまさかと思った通りだった。敬の知る彼女とはすでに別れていて今の彼女はその次だった。
「あれは喧嘩じゃね～よ。一方的にあんな怒んなくてもよくね～？」
敬にはわかっていた。聡は一方的といったが原因は必ず聡にある。いずれにしても聡が彼女をコロコロ変えるのは今に始まったことではない。

「てか俺はどうでもいいんだよ。自分の心配しやがれ」
「心配ってほどでもないだろ」
「お～、そんなこというか、じゃあ誰かにとられてもいいのか？」
それだけは困ると思ったものの、敬はなかなか話しかけれなかった。自信はあったが、嫌われてないという確信はなかった。
「とりあえずはなしかけろよ、じゃないとなにも進展しないぞ」
「…あぁ」
結局、敬の反撃むなしく聡に正論を言われ朝の言い合いは敗北に終わった。それと同時に機会があればいつでも話しかけようと思った。聡に言われた通り、もう時間がない。躊躇している余裕などないのだ。

7、急展開（前書き）

時間かかりました
評価等宜しくお願いします！

7、急展開

今日も長い授業が終わり、下校のチャイムが鳴った。
敬は今日こそは早坂と普通に話そうと決意していたのだが、今日も話すことなく学校は終わってしまった。

あんな事を言った後なので多少恥ずかしい気持ちもあったが、時間が無いことを自覚していた。

なぜ今まで時間があったのに手を伸ばそうとしなかったのかと自分が腹立たしくなった時もあり、徐々に焦りだしていた。
しかし焦りが出れば出るほど
「普通に」接することが出来なくなる。

だが、その日の帰り道、敬は思いがけない幸運と出会った。

「なぁお前さぁ、オンナノコと一緒にかえったことあるのかよ？」
また嫌味か　そううんざり思いながら軽く相槌をうった。「いや実はさ、早坂が明日お前と帰りたいらしくてさ」

「へ〜」

「今なんて？」
適当に聞き流していたせいで、大事な用件まで流れてしまうところだった。聡は多少面倒くさそうに言った。
「だから、早坂がお前と帰りたいって。今日は用事あるみたいだから明日。どうする？」
「そりゃ…まぁ…」
「はっきりしろよな、断る理由がねーじゃん。どこまで奥手なんだよお前は！」
「でも初めて言われたし…お前みたいにできねーだろ」
確かに聡と敬では、女の子に対する接し方の
「上手さ」が違う。
「そんなことで心配すんなよ。俺にだって初めての時はあったんだ。案外上手くいくもんよ」
百戦錬磨の聡にそう言われて、少しホッとした。
「お、おう。じゃ明日…頑張る…」
「なにも頑張んなくてもいいって。いつも通りでいいよ」

不安は残るものの、とりあえず明日は、憧れの早坂香織と帰れることになった。

「あれ？でもなんでお前に聞いたんだ？」

普通、一緒に帰りたい相手に直接訊ねるのに　とおもい聞いてみたが、聡にもそんなことまでは分からなかった。

「そんなことどーでもいいじゃん。俺がお前と仲良いからじゃねぇの？」

聡はそう言ったが、敬はそれでは納得できなかった。確かにどうでもいいことなのだが、どこか腑におちない。

「明日学校行ったら返事しとけよ」

聡は最後にそう言ってわかれた。

ひとりになった敬は、明日の帰りに何を話そうかと、何か早坂香織が笑ってくれそうな話はないかとずっと考えていた。せっかく舞い込んだチャンスで、失敗するようなことがあれば二度と話すことさえできなくなるかも知れない。

それと同時に、なぜ聡に話したのか、自分に直接話してくれれば嬉しさが何倍にもなっただろうにと思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5942d/

またどこかで笑って ～僕の春～

2010年11月21日03時07分発行